

第2回 SEOY日本プログラム開催に寄せて 社会起業家がけん引する資本主義の進化



SEOY審査委員

田坂 広志氏

多摩大学大学院教授・社会起業家フォーラム代表

資本主義が今、進化を始めている。これまでの資本主義が基盤としてきた「貨幣経済(マネタリー経済)」に対し、ウィキペディアやリナックスに象徴されるような、人々の共感や精神の充足に価値を置く「ボランタリー経済」が、ネット革命を契機として急速な成長を遂げている。

そして、経営における利益追求と社会貢献。経済におけるマネタリー経済とボランタリー経済。これまで対立的に考えられてきたこれらが互いに「相互浸透」を始めており、それが、まさに資本主義の進化を促している。

その象徴が、世界的な潮流となった「企業の社会的責任(CSR)」であり、石川治江さんのような志と使命感を持って事業を立ち上げる「社会起業家」の台頭だ。すなわち、マネタリー経済の中心にあった営利企業が本業を通じて社会貢献を真剣に考え始める一方、ボランタリー経済の中心にあったNPOが、事業的手法で社会的課題の解決を図ろうとしており、まさに相互浸透が起こっている。

その先にあるのは、実は私たち日本人にとっては懐かしい世界だ。日本では昔から、「働く」とは「傍(はた)を楽(らく)にする」とことと言われてきた。日本人にとって労働とは本来、社会貢献そのものだ。また日本型資本主義において、利益追求と社会貢献は決して矛盾しない。「利益とは社会に貢献したことの証しである」「企業が多くの利益を得たということは、その利益を使ってさらなる社会貢献をせよとの世の声である」という言葉が、それを象徴している。

そして、日本には昔から、「暗黙の智慧」「人間同士の縁や恩」「信頼や共感」「志や使命感」「世の声や天の配剤」など「目に見えない価値」を見つめる成熟した文化があった。その日本に育った資本主義は、これから世界の資本主義が「目に見えない資本」を重視し、成熟していくべき時代に、極めて大きな意味を持ってくるだろう。